

グードルーン・パウゼヴァングのアンチ原子力文学 —リアルなフィクションによる警告—

重竹 芳江*

Anti-Atomkraftliteratur von Gudrun Pausewang
—Eine Warnung durch realnahe Fiktion—

Yoshie SHIGETAKE

要 旨

本論ではドイツの女性作家グードルーン・パウゼヴァングの反原子力をテーマとする作品に注目し、原発の完全撤廃を決定したドイツの政策への影響を鑑み、読者の感情に訴える作品の力について考察する。

グードルーン・パウゼヴァング(1928-2020)は様々な社会問題を取り上げた小説を書いているが、その一つがアンチ原子力をテーマとしたものである。1983年、核兵器の配置に抗議する平和運動に参加した後、最初のアンチ原子力小説『シェーヴェンボルンの最後の子どもたち』を刊行した。チェルノブイリ原発事故の後、1987年には2番目のアンチ原子力小説として『みえない雲』を発表。両作品ともに大評判となり、西ドイツでは学校の必読図書にも指定されていた。パウゼヴァングはこれらの小説を14歳以上の児童向けの図書として執筆した。広島の実験被害者の記録を参考に書かれた放射能の被害状況の描写はむごたらしく悲惨なもので、このような作品を児童書として出すことに対して保護者からの批判もあったほどであるが、パウゼヴァングはこの年代の子どもたちに特別な期待を寄せており、平和の尊さ、原子力の恐怖を読書を通じて意図的に体験させていた。

福島の実験事故の後、ドイツ政府が2022年末までに国内の原発を撤廃することをすみやかに決めた背景にはドイツ国内に定着していたアンチ原発ムードの存在があるが、子ども時代に読んだパウゼヴァングのアンチ原発小説もそのような国民感情の一部となって世論にも影響を及ぼしてきたのではないかと考えられる。

【キーワード】 ドイツ、児童文学、原子力エネルギー、平和運動、脱原発

1. ドイツと脱原発

2011年の福島第一原子力発電所の事故後、ドイツは原子力発電から完全撤退することを迅

* 全学教育機構

速に決断し、2022年12月31日までの期限に向けて着々とその準備を進めている。原子力からの撤退を決定したのはドイツ政府であるが、その背景にはドイツ国内にアンチ原発ムードが定着していた事実がある。この風潮なくしてドイツ政府があのようにすばやく原発からの撤退を決めることができたとは考え難い。

ドイツの反原発運動の歴史は40年以上に亘る長いものである。1970年代、バーデン・ヴュルテンベルク州ヴィールでの座り込み運動を伴う原発建設反対運動に始まり¹、グローンデ、ブロックドルフ、ゴアレーベン²、カルカー³、ヴァッカーズドルフ⁴など各地で大規模な反原発の抗議運動が繰り返された。2011年の福島原発事故の後にもドイツ各地で即座に大きなデモが繰り広げられ⁵、その様子はテレビやインターネットを通じて世界に発信された。

原子力といえば、核兵器の使用にしても原子力発電所の事故にしても最も懸念されるのは目に見えない放射能による健康への被害であるが、原発建設に対する最初の抗議運動は意外にも放射能を恐れてのものではなかった。このときに反対派として立ち上がったのは野菜や果物、ワイン用のブドウを栽培する地元カイザーシュトゥール地域の農家の人々で、原子力発電所から出る大量の水蒸気によって周辺地区の気候が変わり、農作物の生育に影響が出るのではないかというのが彼らの危惧であった。これが原発建設反対運動の契機となったのである。その後、1986年4月26日に起きたチェルノブイリ原発事故の後、ドイツでは市民による反原発運動への機運が飛躍的に高まった。反原発を旗印にした環境政党「緑の党」が支持者を増やし、政権運営に無視できない大きな影響を持つようになったのもチェルノブイリ原発事故の後のことである。

現在ではドイツの政党はすべて「脱原発」が基本となっている。原発を推進しているのはもはや有権者にそっぽを向かれてしまうことをどの党も理解しているのである。2010年12月、メルケル政権は一旦は決まっていた廃炉期限を延長した。与党である保守政党CDU（キリスト教民主同盟）は元来は原発推進派であったが、2005年の選挙では公約に原発推進を掲げていなかった。そんなことをすれば対抗するSPD（ドイツ社会民主党）や緑の党に太刀打ちできないがための策だったのだろうが、2010年末の突然の廃炉期限延長の決定はそれが選挙で国民の気持ちをそらさないための策であったことをにおわせるようなニュースであった。

2011年3月11日、東日本大震災の地震と津波により、福島第一原発で炉心融解の重大事故が起こる。その後のドイツの反応は早かった。本稿では詳細は省くが、事故からわずか4日後の3月15日には古い原発の運転を3ヶ月間停止させ⁶、約4か月後の2011年7月8日には2022年末までに原発から全面撤退することがドイツ連邦議会で可決された⁷。

このようにトントン拍子に原発完全撤退へと進んだのは、初めに触れたようにそれだけの下地がドイツ国内にあったからである。ドイツ国民は脱原発に積極的だった。自然を愛するドイツ的性格のため、石橋を叩いて渡る、もしくはリスクを嫌う国民性のためなどとこれには様々な理由が挙げられうるだろうが、特にチェルノブイリ原発事故以降の脱原発運動が盛り上がりを見せた原因の一つには、作家グードルーン・パウゼヴァング Gudrun Pausewang

による文学作品の影響が考えられる。

2. 作者グートルーン・パウゼヴァングの生涯

ドイツの女性作家グートルーン・パウゼヴァングは1928年3月3日、6人兄弟の長女としてチェコスロヴァキア（当時）のヴィヒシュタットウル（Wichstadt）に誕生した。当地は現在ではチェコの一部である。父親はこの村の出身、母親フリーデルはドイツのザールブリュッケンの出身であった。

グートルーンの両親はドイツのハルツで仕事を通じて知り合った。母親は1923年から幼稚園の先生として働いていた。父親は農業機械のエンジニアであり、1922年からは農場の管理人であった。二人とも当時流行っていたワンダーフォーゲル運動に強く影響を受けていた。ワンダーフォーゲル運動は19世紀末にドイツで発生した青少年運動の一種で、当時急速に進んだ工業化とそれに伴う一連の生活上の変化に対するアンチ工業化運動ともいえる。パウゼヴァング一家が暮らしていたのは小さなヴィヒシュタットウル村からさらに離れた辺境地ロズィンカヴィーゼ（Rosinkawiese）であったが、これは工業や産業とは独立した形で自然とじかに結び付いて暮らしたいという両親が意図的に選んだ場所であった。

両親は人里離れたロズィンカヴィーゼに木造小屋を建て、6人の子どもたちを自然に囲まれたその地で育てた。自給自足が原則で、ヤギやニワトリも飼っていた。肉食主義で飲酒をしないというのも両親の方針である。真冬も寝室を暖房で温めることはしなかった。厳寒時のみ温めたレンガをベッドに入れて暖を取ったという。パウゼヴァング家は今日でいうエコロジーな暮らしを1920年当時に実践していた一家であった。家族だけで暮らしていた幼少時は何の問題もなかったが、小学校に上がると幼いグートルーンは自分の家族が他の子どもたちの家庭と著しく違っていることに気づき、居心地の悪さを感じていた。

父親は遅くとも1935年の時点でナチスドイツに賛同していた。彼らが暮らしていた地区はズデーデンラントの一部、つまりチェコでドイツ語を話す少数派が居住していた土地であった。この土地をチェコの他の地区から切り離してナチスドイツの一部にするというのが「ズデーデン問題」であるが、ミュンヘン協定によって1938年10月にズデーデンラントがナチスドイツに併合されると、一時期プレスラウに移っていたパウゼヴァング一家は再びロズィンカヴィーゼに戻ってきた。両親ともナチスドイツの党员であった。グートルーンも「ドイツ少女団」のメンバーとなった。当時の他の子どもたちと同様、グートルーンもナチス思想を植え付けられ、当時はそれをそのまま信じこんでいた。1943年、ナチスの兵士として参戦していた父親が戦死する。

終戦後すぐ、1945年5月22日に追われるようにして故郷ロズィンカヴィーゼを後にした。グートルーンは17歳になっていた。ほとんどを徒歩で移動し、10月にハンブルクに到着、母親の妹のところを身を寄せる。翌1946年にヴィースバーデンの祖父母の元へ行き、女子ギムナジウムに通う。1948年から1951年まで教職に就くために大学に通った。その後1951年には

女子校に就職、1955年まで、西ドイツのヴィースバーデン、ラーンの2か所で教師として働いた。1956年、自らの希望で南アメリカのチリに移住。ドイツ人学校で教職に就き、1963年まで休暇のたびに南アメリカの方々を旅行してまわった。この間、1959年にキューバ革命が起これ、最初の小説『リオ・アマルゴ道の終わり Rio Amargo oder das Ende des Weges』を執筆した。

1963年、西ドイツに帰国。マインツの小学校で教職に就く。1967年、結婚。1968年、再び南アメリカに渡り、コロンビアのドイツ人学校で働く。1970年、息子マルティンを出産、1972年に離婚して西ドイツに帰国、息子マルティン、母親フリーデルの3人でシュリッツに暮らし始める。この年、最初の児童向け図書を執筆している（『裏庭の水の精 Hinterm Haus der Wassermann』）。本職としては1989年に定年退職するまでシュリッツの小学校で教職に携わった。

この間、パウゼヴァングは社会問題をテーマとする小説を何作も発表している。初期のものにはラテンアメリカで目にした貧しい人々を取り上げたものが多いが、このジャンルの代表作として児童書『そしてエミリオが来る Und dann kommt Emilio』（1974年）、『おなががすいて、喉が渴いた Ich habe Hunger, ich habe Durst』（1981年）（「チューリヒ児童文学賞」、「本の虫賞」を受賞）がある。

冷戦下の1983年10月、軍備縮小を求める大規模なデモがボンであったが、グードルーン・パウゼヴァングもこれに参加した。⁸同年、原子爆弾で破壊された世界を描いた『シェーヴェンボルン最後の子どもたち Die letzten Kinder von Schewenborn』を刊行。1984年、この作品に対してグスタフ・ハイネマン平和賞⁹が授けられた。受賞の際の演説は1985年12月31日に大手新聞ツァイト紙に掲載された。他にも「本の虫賞」の他、多数の賞で表彰される。

1987年4月26日、チェルノブイリ原発事故勃発、同年中に原子力発電所の事故による被害を描いた『みえない雲 Die Wolke』刊行。本作に対しては「本の虫賞」の他、翌1988年に「ドイツ児童文学賞」が授与された。¹⁰

1989年、教職を定年退職。以降、作家活動が主になり、特にこれまで時間的に不可能であった読者と触れ合う旅を積極的に実施した。1992年、アウシュヴィッツとナチスの過去に関する最初の児童書『8月の旅 Reise im August』を刊行。この作品で「チューリヒ児童文学賞」を受賞。同年、母親フリーデルが⁹⁰歳で死去した。

2011年3月11日、東日本大震災の際に福島で原発事故が発生。同年、原子力エネルギーによる被害をテーマとする『そのずっと後で Noch lange danach』を刊行。

2017年、パウゼヴァングのこれまでの全作品に対して「ドイツ児童文学賞」が授与された。2020年1月23日、91歳にて死去。

3. パウゼヴァングと児童文学

以上、グードルーン・パウゼヴァングの生涯を概観してきたが、大自然の中での幼少時代、

ナチスに傾倒する両親のもとでの子ども時代、居住地を追われて難民となった10代後半、南アメリカでの惨状を目の当たりにした20代後半から30代、核の脅威を思い知らされた40代から50代と、人生の折々でくぐってきた様々な体験が作品のテーマとして昇華していることが容易に推測できる。パウゼヴァングの小説のテーマは多岐にわたっている。分類すると、共生、貧困問題、平和運動、環境保護運動、ナチスの過去との対決などであるが、共通しているのは何れも現実世界のアクチュアルな社会問題をすくい取っている点である。戦前・戦中・戦後を通して平均的ドイツ人とは一風違った状況に身を置き、その時々々の社会問題を自分の目で見えてきたパウゼヴァングならではのテーマ選択である。

パウゼヴァングは大人向けの本と並んで子ども向け、特に高学年の生徒を読者対象に据えた本を数多く書いている。これは本格的に執筆を始めた1970年代から一貫した方針であったが、子ども向けの作品とはいえそれらは読者に不協和音のような心の葛藤をもたらすものであり、ハッピーエンドでもない。たとえば児童書として深刻なテーマを扱った最初の作品『そしてエミリオがやってくる Und dann kommt Emilio』が一例であるが、当時のガストアルバイター（西ドイツに出稼ぎに来ていた外国人労働者）との共生を理想抜きの現実として突きつけたものである。理想としての「良き隣人」である外国人労働者と実際に大人たちが子供たちの目の前で見せているような「よそ者」に対する距離感は乖離したものであり、子どもたちはそれを的確に感じ取っている。そこにはリアルな現実が描かれているのである。

また、ラテンアメリカの大都会を舞台に現地の子どもたちとその家族が直面している悲惨な生活環境を描いた作品にも子ども向けのものがある。『カルデラ一家の困窮 Die Not der Familie Caldera』(1977)、『小間使いたちのストライキ Der Streik der Dienstmädchen』(1979)、『おなががすいて、喉が渴いた』(1981)などでは、努力によって人並みの生活を勝ち取ったものの事故や環境の変化のためにいとも簡単に貧困に逆戻りする家族や貧しい労働者による抵抗運動を取り扱っているが、物語の結末に希望に満ちた問題の解決はなく、やはりハッピーエンドには終わらない。子ども向けだからとして現実の負の側面をオブラートでくるむようなことをしないのがパウゼヴァングの流儀であった。

最初の6作品は大人向けの作品であったが¹¹、その後パウゼヴァングは意識的に読者対象層を大人から子どもへと移行した。これは偶然の成り行きではなく、作者の明確な意図のもとに行われたものである。「なぜ私が子供のための本を書くのか Warum ich Bücher für Kinder schreibe」という短いエッセイがある。¹²ここには子どもを読者対象にすることは容易ではないこと、また同時に非常に意義のあることだという考えが端的にまとめられている。

大人向けの6冊の小説を出した後ようやく私は初めて児童書を書きました。私はどきどきしながら書いたものです。そして子供たちがこれを喜んで受け入れてくれたことに私は誇りを持っており、幸せを感じています。¹³

このような書き出しで始まるこのエッセイでは、続けて大人向けの本では「リアルではないこと」は好まれない、ファンタジーの要素を大人は拒絶しがちであると述べた後、子どもにはこのような現実と幻想の区別が大人ほどなく、ファンタジーであっても楽々と理解することができるとしている。「子供はまだ偏見がないのです。」¹⁴ とはいえ、子どもの読者の視線は厳しい。子どもたちは様々な要求を出し、いい加減な作品であると子どもの読者に受け入れられることはない。パウゼヴァングは真摯な思いで児童向け作品に取り組んでいたのである。

子どもをまじめに取り扱うに度を過ぎることはありません。それは童話であろうとリアルな世界の物語であろうとサイエンス・フィクションであろうと同じです。政治的なテーマ、エコロジーのテーマ、歴史的なテーマであっても、大人が年齢に適したものを準備すれば子供たちはわけもなく消化することができます。¹⁵

「年齢に適した altersgerecht」作品の提供という点は特に重要である。一般の児童書と同様、パウゼヴァングの児童書にも出版段階で読者層として推奨される年齢が記載されているが、「8歳以上」から「14歳以上」まで細かく指定が分けられている。明確な基準をパウゼヴァングが表記しているわけではないが、言葉の使い方だけでなく、とりわけテーマの提示の仕方に作者の配慮が感じられる。

たとえば環境保護をテーマとしたものには、『地球の中の子どもたち Die Kinder in der Erde』(1988)、『少年とカモメ Der Junge und die Möwen』(1998)、『ロズインカヴィーゼ』(1980)があるが、それぞれ対象年齢が5歳以上、8歳以上、14歳以上となっている。

『地球の中の子どもたち』は絵本の形態を取っており、読み聞かせも念頭においた年齢設定であろう。この作品には「環境を破壊する悪い大人たち」と「地球を守りたい子どもたち」が対立する二者として登場し、無力な子どもが地球と協力して大人に考えを改めさせるといった善悪分かりやすい構造になっているほか、「ちきゅうさん」と会話をするというファンタジー要素も組み込まれている。『少年とカモメ』は環境保護をテーマとする子供向け作品を一冊にまとめた中の一作である。オイルタンカー事故で流出した油の犠牲となった弱者カモメを救おうと必死になる少年の姿を描いた作品であるが、少年の手厚い看病も空しく傷ついたカモメたちは全滅してしまう。死んだカモメを何十羽も市場に持って行って無言の抗議をする少年に、読者である小学校低学年の子どもたちは共感を覚えると同時に行動のモデルのようなものを読み取るのではないだろうか。悲しみと怒りに訴えかけるような短編である。『ロズインカヴィーゼ』は自然に囲まれた作者自身の子ども時代を作品にしたもので、このような生活の長所、短所の両者を余すところなく提示している。どちらがいいかという判断は読者に任されているが、別の生き方 Alternative を示すことで、別の生活形態への可能性、現代の資本主義社会であたりまえだと思われていた生活を立ち止まって振り返らせる

ような作品になっている。

同じテーマを取り扱ってはいても対象読者の年齢に応じてその提示の仕方には違いがある。もちろん子どもによって発達に差はあるであろうが、長年小学校教師として生身の子どもたちと直に関わってきたパウゼヴァングが対象年齢ごとの子どもたちがどのくらいの受容能力を有しているかをよく理解していたことは間違いないだろう。オーストリアの高校の教員で文学作品を授業に取り入れているアントシュトラサー氏は、「私の考えでは、10歳から14歳（15歳）の間の若い読者は最も正直で最も無意識的な発言をする批評家である」¹⁶と述べているが、社会問題をテーマとするパウゼヴァングの作品のうち、一見子ども向けとは思えないような残酷な描写や内容を含む幾つもの図書が「14歳以上」に指定されているのも偶然の一致ではないだろう。パウゼヴァング自身、深刻な内容の『シェーヴェンボルンの最後の子どもたち』を「意図的に子どもであることと大人であることの間にいる若い人のために書いた」¹⁷と断言しているが、児童の中でもこの年代の子どもたちに特別な期待を寄せているのである。

『シェーヴェンボルンの最後の子どもたち』（1983）と『みえない雲』（1987）はどちらも読書推奨年齢が14歳以上に指定されたものであり、同時に子どもに読ませるには悲惨すぎる、または残酷すぎてショッキングだと批判が出ている点で共通する作品でもある。つぎにこの2作を含むパウゼヴァングのアンチ原子力をテーマとした作品に焦点を当てて考察を続ける。

4. リアルなフィクション

パウゼヴァングは原子力による惨事を扱った小説をこれまでに3作出している。いずれも14歳以上を読書推奨年齢にして出版されているものである。最初の作品は1983年に出された『シェーヴェンボルンの最後の子どもたち』、2作目がチェルノブイリ原発事故を契機に書かれた1987年の『見えない雲』¹⁸、3作目が福島原発事故後に書かれた2011年刊行の『そのずっと後で』である。主人公が未成年である点も3作品の共通点である。『シェーヴェンボルンの最後の子どもたち』の主人公は12歳の少年ローラント、『みえない雲』では14歳の少女ヤンナ・ベルタ、『そのずっと後で』では16歳の少女ヴィータが主人公であり、未成年の子どもの目を通した形で原子力による被害が描かれている。

第1作の『シェーヴェンボルンの最後の子どもたち』は東西冷戦の真只中にドイツに原子爆弾が落とされたという設定になっており、原子力は破滅をもたらす脅威的な核兵器として描かれている。当時アメリカを中心とする「西側」、ソ連を中心とする「東側」は、互いに核兵器の開発と宇宙開発をどちらが優れているかを競い合うようにエスカレートさせていた。そのため核兵器の使用で世界が終わるとするのは小説の中の絵空事ではなく、実際に当時の社会が抱えていた起こりうる悲劇のひとつだったわけである。小説の冒頭のつぎの一節は当時の社会状況を映したものである。

確かに、あの大惨事前の数週間は東西間の緊張について議論が戦わされていた。ふだんはニュースを全く見ない母でさえ、ニュースが始まるとテレビのスイッチを入れていたほどだった。¹⁹

大人たちが懸念しているのは全面核戦争の勃発であった。この後、ローラントの一家が車で森の中を通過しているときに突如激しい光が走ると同時に、大音響と熱波が押し寄せる。子どもであるローラントと姉のユーディトにはわけがわからないが、父親と母親は何が起こったのかを即座に把握している。

「あなたが思うには・・・」母は父に尋ねた。「あなたが思うにはもしかして・・・」
「どうもそのようだね。」父は答えた。「それ以外考えられない」
「でもそんなの無理よ」母は嘆いた。「そんなことあってはだめよ」²⁰

これが原子爆弾の使用を指していることは当時の状況からして自明のことであった。第二次世界大戦後に生じた「東西対決」は政治的緊張を何度も生じさせながらも、「それでもこれまでは何も起きたことはなかった。」²¹のだが、小説の中では最悪の事態が発生し、これがまた現実離れた想像とはいえないところが恐ろしい点であった。小説の中でローラントが体験するぞっとするような体験の数々は、フィクションではあれ、現実にも起こることが予想されるリアリティのあるフィクションである。パウゼヴァングは当時1983年に軍備拡大に反対するデモ活動にも参加している。軍備を拡大して中距離核ミサイルが拡大配備された場合、自分たちが暮らしている場所が核戦争の中心舞台となるかもしれないという差し迫った危機感を当時のドイツ人は抱いていた。もしこの懸念が現実となった場合、その結果としてローラントが小説の中で体験したことを現実世界で私たちが体験するのだということを作品を通じて訴えているのである。

これに対し、第2作『みえない雲』、第3作『そのずっと後で』は暮らしのためのエネルギーを供給する原子力発電所の事故を背景としており、原子力の平和利用もまた核兵器と同様に破滅に通じていると警鐘を鳴らす作品である。原子力のいわゆる「安全神話」、これがたちまちのうちに崩れ去ったのは1986年のチェルノブイリ原発事故であった。当時、風向きのおかげもあって1000～1500km離れたドイツにまでかなりの量の放射能が飛来し、国中を震撼とさせた。パウゼヴァングは軍備拡張に反対し、核戦争を危惧して『シェーヴェンボルンの最後の子どもたち』を書いた。その際、起こり得る放射能の健康に対する被害を広島の原因による被爆者の資料で詳しく調べていた。とはいえパウゼヴァングの念頭にあったのはあくまでも戦争による原子爆弾の使用であり、安全だと信じ込まされていた原子力発電所には全く心配をしていなかった。ところがそれが間違いだったことをチェルノブイリの事故を契機に思い知る。

2008年のインタビューでパウゼヴァングはつぎのように話している。

チェルノブイリの大惨事の最初の一報が入る5分前には私はまだこのテーマで一冊の本を書くことを夢にも見ていませんでした。けれども放射能汚染が中部・北部ヨーロッパまで達したということを経験したとき、ドイツの国境から1500km離れた人口の少ない地域ではなく、人口密度の高いドイツでもしこのような大惨事が起きたとしたらどうなるのだろうかを本で示そうと決めたのです。私は『見えない雲』を警告として書きました。²²

チェルノブイリの事故を経て、原発事故は想定内の惨事となった。ドイツの真ん中で原子力発電所が爆発するかもしれないということがリアリティをもって想像されうようになったのである。

第3作『そのずっと後で』は福島原発事故の後に2011年に書かれた作品であるが、先行する二作品と比べるとドイツ国内でも海外でも残念ながらそれほど大きな反応はなかったようである。今後どのように受容されていくのかは注意深く見届けていきたいが、この作品についての詳細は別の機会に論じたい。

5. 集団的記憶となった社会への警告

パウゼヴァングのアンチ原子力3部作のうち、第1作と第2作はかなりの評判を呼ぶものだった。『シェーヴェンボルンの最後の子どもたち』は、前述したように「グスタフ・ハイネマン平和賞」（1984年）と並んで数々の賞を受賞しただけでなく、10か国以上の外国語に翻訳されている。²³また、第2作の『みえない雲』は1987年に「ドイツ児童文学賞」を受賞したのち、ヘッセン州をはじめとして学校授業の課題図書として用いられていたことから広い範囲の児童に読まれていた。『みえない雲』は小説としてのみならず、2006年には映画化され、2008年にはコミックの形で刊行されている²⁴。二重三重に世に知れ渡る機会があったわけである。『シェーヴェンボルンの最後の子どもたち』と『みえない雲』は、当時の若者たちにとって原子力の恐ろしさ、放射能の被害のすさまじさを読書を通じて体験するきっかけとなった。1980年代、1990年代に学校の生徒としてパウゼヴァングのアンチ原子力作品に触れた世代は、2010年代に20代半ばから40代半ばになっていた。本論「ドイツと脱原発」の項で触れたように、ドイツの原発完全撤退が遠く離れた福島原発の事故後すみやかに決定された背景には、脱原発に積極的なドイツの国民感情がある。子ども時代に1000km以上離れたチェルノブイリで原発事故が起こり、パウゼヴァングの作品を通じて「これが自分たちの国で起きたら・・・」という想像を働かさずにはいられなかった世代が社会の中核となっており、ドイツ国内に定着していたアンチ原子力感情の一部を形成していたのではないだろうか。放射能の影響が悲惨でないわけがないのだ。実際、アンチ原子力の3作には放射能による

被害について目をそむけたくなるような情景がまざまざと描かれている。悲惨なのは放射能による直接の被害だけではない。惨事がふりかかったときの人々のパニック、エゴイズム、餓え、渇き、差別、疫病、憎しみ合いなど、起こり得る不快な現象が繰り広げられていく。子どもにはもちろん、大人であってもショッキングな内容である。『シェーヴェンボルンの最後の子どもたち』の中らごく一部であるが該当箇所を取り上げて見てみよう。

まず原子爆弾の熱波と爆風による被害の描写である。原子爆弾らしきものが落とされた直後、人々は閃光を目にし、熱い爆風に曝された。物が当たったりガラスが割れたりして怪我や火傷という負傷が続発している。爆弾炸裂の直後、森の中から祖父母の住むシェーヴェンボルンへと移動するローラント一家は道中そのような負傷者をつぎつぎに目とすることになる。

たくさんの人が怪我人をひきずっていた。ほくはヴィンターベルクさんがいるのに気づいた。アンネマリーを背負っていた。アンネマリーの頭は血だらけで、腕はだらりとたれさがっていた。²⁵

そして時計工房ベネディクスの前では、一人の女の人がショーウィンドウの割れたガラスの破片の血だまりの中に倒れていて、動かなかった。²⁶

男の人がほくたちを追い越した。その人の顔には血が流れていた。髪には血がこびりついていて、その人は子どもを抱いていて、その子も血だらけだった。その人はフルダ通りの病院へ駆け込んでいった。ほくたちが病院の前を通ったときには、大勢の怪我人や怪我人を連れてきたり抱えていたりする人たちが中庭やアーチ門のところに押し寄せていた。²⁷

ここでは一瞬にして失われた平穏な暮らしが赤い血として可視的に描かれている。また爆弾投下の直前まで活動していた人びとが見る間もなく動かぬ死人となってしまった様子が淡々とした調子で語られている。

母インゲは両親（ローラントの祖父母）の安否を気遣って徒歩でフルダに向かったが、状況はさらにひどいものだった。爆心地に近いとみられるフルダの町はほぼ全滅で、何もかも根こそぎ失われていた。そこへ周辺の地域から負傷しながらも生きのびた人々が救いを求めてやってきていた。帰宅したインゲはつぎのように語っている。

みんな、ぞっとするような怪我をしていたの。火傷だったり、手足を失っていたり、失明していたり。その人たちはみんなフルダ谷から来ていた。みんな、お医者さんや救護所や食料や泊まる場所を探していたわ。²⁸

そこ（＝川岸）には大火傷を負った人たちが集まっていた。喉がかわいて半狂乱になっている人たちにたくさん会ったわ。その人たちは川の水を飲んでいて。川は灰と死体でいっぱいだったし、水は放射能で汚染されているに違いなかったのに。²⁹

ほとんどの人が裸だった。来ていた服は焼け焦げてしまったのね。川岸にも死体がたくさんあった。川岸のやぶや葦の茂みの中、それに牧草地の牛の死骸の間にも。皮膚のむけた死体や、焼けただれた死体……。³⁰

さらに悲惨な描写が続く。熱線により皮膚がべろりと剥けてしまった人々がそれでもなお自力で歩いている。あるいは水を求めて川岸で力尽きて死んでいく。これだけの被害を与えた爆弾であっても生き残った人は大勢おり、彼らは助けを求めてさまよっているのである。その悲惨な様子を子どもたちが目にするのしないようにインゲは夫に注意している。

明日には皮膚がむけた人や髪が抜けた人たちを目にすることになる。シェーヴェンボルンはそのような人たちであふれるのよ。数日間は子どもたちを窓に近づけないで。見なくてはならないもので一生忘れられないようなショックを受けるだろうから。³¹

翌日以降、ローラントは逃げてくる負傷者を何人も見ることになる。

爆弾が落とされた翌朝にはもう、フルダ方面から生き残った人たちの最初の団がよろめきながら歩いてくるのが窓から見えた。灰だらけで血だらけの人々、中には襤褸きれがぶらぶらしている人もいた。あれは服の切れ端だったんだろうか？それとも皮膚？ぼくにはよく見てそれを確かめるような勇気はなかった。³²

放射能による副作用の出方は、爆心地からの距離、被爆した場所の状況に応じて人によって様々である。ローラントが気にかけて世話をしていた少女アネッテの祖父は病院にたどり着くとすぐに原爆症の症状が出て亡くなった。

発熱し、黄色い痰を吐いて、絶えず水を欲しがった。そして体中、茶色い斑点でいっぱいになり、髪の毛が抜け始めた。³³

アネッテにも被爆の症状が出始め、あっという間に亡くなってしまった。

彼女はぼくが食べ物を口まで持っていっても何も食べられなくなった。具合はどんどん悪くなった。下痢が始まり、血も吐いた。髪の毛は束になって抜け、足の傷が膿んだ。³⁴

病院に寝かされている人はつぎつぎに原爆症を発症し、死んでいく。パウゼヴァングが広島原爆の犠牲者について書かれた本で勉強したこのような個々の症状の描写はリアルなだけに恐ろしさもひとしおである。

ほとんどの人が放射線病にかかっていた。まず、最初にあらわれる症状は、抑えようのないのどの渴きだった。ほくもよく知っていた。のどがかわくと、みんな気が狂ったようになる。そのあとにやってくるのは吐き気、下痢、高熱だ。髪の毛が束になって抜け落ち、歯がぐらぐらし始める。血を吐く。そして、身体中茶色い斑点でいっぱいになる。皮下出血だ。飲み込むことができなくなり、心拍が不規則になり、あらゆる粘膜が出血する。最後は、うわ言だけになり、意識がなくなり、そして死んでしまう。すぐに亡くなる人もいれば、長い間苦しむ人もいた。でも、ほとんどの場合死んでしまうことはわかっていた。そして、爆弾が落ちたときに爆心に近いところにいた人ほど病気はひどかった。³⁵

ローラントの姉ユーディトにも被爆症状が現れる。ユーディトはローラントと同じ場所にいたが、乗っていた車の中でユーディトが座っていた場所はたまたま爆風が吹いてきた側だったのだ。

ユーディトは無言のままだった。ただクシを持った手をあげて髪をとかした。クシにはたっぷり一束の髪がひっかかって残った。ユーディトは髪一束をクシの歯からはずし、ピロードバリのソファのひじかけの上に置いた。そしてもう一度髪をとかした。するとまた茶色の輝くような巻き毛の束が抜けた。³⁶

母が初めて起き上がった日の夜、ユーディトが倒れた。高熱だった。彼女はやせ細って、ジーンズはやっと腰にひっかかっているくらいだった。もう何も食べようとせず、飲むことだけを欲した。けれども飲みこむのさえ、日増しに苦勞を要するようになった。一度頭を覆っていたスカーフがずり落ちたことがあった。ほくはユーディトがそんなふうになっているのを見て叫び声をあげてしまった。もう髪がなかったのだ。でもその瞬間、ほくは叫び声をあげてしまったのを悔やんだ。ほくがぎょっとしたことにユーディトがとても傷ついたと気づいたからだ。

身体が変色し、斑点だらけになり、そしてユーディトは死んだ。とても静かに、不平も言わずに。あっさりと死んでしまった。³⁷

外傷でも放射能でも疫病でも死ななかった人が餓死することもあった。盗みを働いて殺される人がいた。身体障害者のアンドレーアスは自殺をしようにも自分ではできず、ローラン

トに手伝いを頼む。生まれてきたローラントの妹には両腕と両目がなく、父親がそっと殺して葬る。原爆が落とされた後、終わりなく続く悲劇をパウゼヴァングは連綿と書き綴っている。

『シェーヴェンボルンの最後の子どもたち』に対して与えられた「グスタフ・ハイネマン平和賞」授与の際の演説で、パウゼヴァングは保護者からの批判についても触れている。

親御さんの中には、私が『シェーヴェンボルン最後の子どもたち』で子どもに過大な要求をしていると非難する人もいます。私が子どもたちの心をかき乱し、子どもたちが一人では克服できないような不安の中に突きやると批判する人がいるのです。³⁸

しかしながら、実際の世界がそのようなになっているのなら、「お話」の中でそれを覆い隠したところで何の役にも立たない。パウゼヴァングは同じ演説の中でつぎのように語っている。

私たち大人が子どもたちを心配事や疑い、恐怖や悲惨さから引き離し、子どもたちに世界をまるでまだ無傷なものででもあるように示そうと絶え間なく努力したなら、私たちのすることは子どもたちには気に入らないでしょう。おそらく私たちは子どもたちに対し、世界がまだ無傷だったときにどんなに美しかったのか、またもし世界がまだ無傷であるとしたらどんなに美しいであろうかを示すべきなのです。けれど、私たちはまた子どもたちに対し、彼らと私たちの人生、彼らと私たちの未来を守るために関与させるべきであり、私たちは子どもたちと一緒にこの使命に取り掛かるべきなのです。³⁹

パウゼヴァングの作品はフィクションとはいえ現実の世界の問題を取り扱ったものである。現実が悲惨で残酷なものであるのなら作品中でそれをしっかりと子どもたちに見せ、「自分たちの未来に再びチャンスを与えるには私たちは何をすることができるだろう」⁴⁰ということを考えさせる意図をもって書かれたものなのである。

パウゼヴァングの文学作品がドイツの反原発運動に実際のところどれほどの影響があったのか、それを数値で測ることは無論不可能であるが、刊行後すぐにベストセラーとなったこの2作が特定の年代層の意識下に刷り込まれてきたのは事実である。彼らの中に作品から受けた印象が色濃く残っているのは間違いないだろう。福島原発事故当時、彼らは社会の中核となる30代後半から40代になっていた。事故の4日後、2011年3月15日に出たフランクフルター・アルゲマイネ新聞の記事では、学校の教材としてパウゼヴァングのアンチ原子力作品を読んだ年代の「集団記憶 das kollektive Gedächtnis」という語を用いてこの影響が言い表されている。⁴¹大人になる直前の多感な子ども時代に読んだ作品から受け取った不安・恐怖は、福島映像を目にしたとき、心の奥底から蘇って世論の一端を形成するに至ったのでは

ないだろうか。

付記

本論は「平成30年度芸術学系若手・女性研究者等支援事業」の助成を受けたものである。

注

¹ 1973年、南部原子力発電がブライザッハに原発を建設しようとしたとき、住民から反発の声が上がった。反対集会やデモが組織され、約6万5千人が原発建設に反対する嘆願書に署名した。そこで南部原子力発電はブライザッハでの建設をあきらめ、建設地を約20km離れたヴィールに移し、工事を強行した。が、ここでも農民が反対運動を組織し、訴訟を起こした。現地の住民だけでなく、フライブルク大学の学生たちや原発反対運動を行っていたアルザス地方のフランス人も加わって約200人が建設用地で座り込みを行った。警官隊は放水をするなど乱暴な方法で座り込みグループを追い払ったが、その数は却ってふくれあがり、数日後には2万8千人が座り込み抗議に参加した。結局、電力会社は操業許可を得ることができず、原発建設計画は立ち消えになった。ヴィールでの抗議運動はメディアによって大きく報道され、その後、全国の反原発運動に強い影響を与えた。建設を後押ししていたバーデン・ヴュルテンベルク州も1987年に原発建設の中止を宣言。ヴィールの建設予定地は1995年以来、自然保護地区に指定されている。この抗議運動の詳細は実話を元にした小説になっている。参考：Julia Heinecke: *Kalter Nebel. Widerstand am Kaiserstuhl*. Freiburg im Breisgau 2019.

² グローンデ原発とブロックドルフ原発は1975年に計画が開始された。ゴアレーベンが高放射性廃棄物の最終貯蔵処分施設の候補地となった岩塩坑であり、1977年に調査が開始された。電力業界はこの施設の地質調査などのために15億ユーロを注ぎ込んだが、激しい反対運動と法廷闘争のため、この地は使われていない。参考：熊谷徹『なぜメルケルは「転向」したのか』、P. 71、P. 80

³ ノルトライン・ヴェストファーレン州のカルカーでは1970年に計画が開始された。高速増殖炉の建設が予定されていた。15年かけて発電所を建設したが、反対派による激しい抗議デモが起これ、訴訟も出された。建設反対デモを規制する際、当時の首相ヘルムート・シュミットは警察官を総動員して戒厳令のような強硬措置を取った。1977年9月24日、反原発派は全国から10万人の反対派市民を動員する予定のデモを計画していたが、連邦政府と州政府は全国各地に10万か所以上を超える検問所を設けさせ、高速道路を封鎖し、デモ参加者が乗ったバスや鉄道をストップさせて邪魔をした。このためデモの会場に到達できたのは5万人程度にとどまったが、政府に対する世論の反感は却って高まった。抗議運動のほか、州政府もリスクが大きすぎることを理由に運転許可を拒み、チェルノブイリ原発事故の後、高速増殖炉に対する批判が一段と高まると、事業所は1991年に操業を断念した。現在は遊園地として利用されている。参考：熊谷徹『なぜメルケルは「転向」したのか』、P. 71、P. 80、P. 82、P. 93)

⁴ バイエレン州ヴァッカーズドルフには使用済み核燃料の再処理工場が立てられる予定であったが、反対派住民と警察の激しい衝突を招き、その結果建設工事が遅れ、費用の増大に音を上げた事業者が1989年に建設を断念した。参考：若尾祐司・本田宏『反核から脱原発へ』、昭和堂、2012年

- ⁵ 2011年3月12日、バーデン・ヴュルテンベルク州ネッカーヴェストハイム原発の周辺では6万人の市民が原発廃止を求めるデモを行った。参考：熊谷徹『なぜメルケルは「転向」したのか』P.59-60.
- ⁶ 2011年3月15日、ドイツ国内で31年以上稼働していた8基の古い原子炉を3か月間一時停止させ、十分な耐久性があるかどうかストレステストを行うように命じたことを指す。「原子力モラトリアム」という。
- ⁷ メルケル首相は、2011年3月14日に原発運転期間延長の凍結し、翌3月15日には1980年までに稼働を開始した古い原発7基の運転を3ヶ月間停止すると発表した。さらに5月30日の政府与党幹部協議で、脱原発の基本案が決定される。その内容は、停止中の原発8基を即時閉鎖し、残る9基を2015年から2022年にかけて5段階で閉鎖するというものだった。この法案は6月30日に連邦議会(Bundestag)で可決され(CDU/CSU, FDP, SPD、緑の党が賛成)、7月8日には連邦参議院(Bundesrat)でも承認された。参考：若尾祐司・本田宏『反核から脱原発へ』、昭和堂2012年、P.243.
- ⁸ 1981年10月、1982年6月、1983年10月の3回、西ドイツでいわゆるNATOの二重決定に反対する市民が集結して大規模なデモ抗議が行われた。1981年には作家のハインリヒ・マンも加わった。パウゼヴァングは1983年のデモ抗議に参加している。
- ⁹ 「児童書のためのグスタフ・ハイネマン平和賞 Gustav-Heinemann-Friedenspreis für Kinder- und Jugendbücher」は、反戦主義、平和主義を貫いたかつての連邦大統領グスタフ・ハイネマンの名を冠する文学賞である。1969年から1983年まではハイネマン主導で創設された「平和と紛争の研究のための会」が毎年平和に関する児童書に対して贈ってきた賞であったが、1983年にこの機関がなくなってからはノルトライン・ヴェストファーレン州が引き継ぎ、創設者ハイネマンの名を賞の名称に入れている。
- ¹⁰ ドイツ児童文学賞の受賞もいわくつきのものであった。参考：Margarete Voll: *Störfalle. Der Streit um die Verleihung des Jugendliteraturpreises*. In: Gabriele Runge (Hrsg.): *Über Gudrun Pausewang*. Ravensberger Buchverlag 1991. S.66-71.
- ¹¹ 『リオ・アマルゴ Rio Amargo』(1959)、『トンゲイへの道 Der Weg nach Tongay』(1965)、『フォルトゥナ広場 Plaza Fortuna』(1966)、『ボリビアの結婚式 Bolivianische Hochzeit』(1968)、『グアダルーペ Guadalupe』(1970)、『ドナ・アガタの誘拐 Die Entführung der Dona Agata』(1971)の6作品。
- ¹² In: Gabriele Runge (Hrsg.): *Über Gudrun Pausewang*. Ravensburger Buchverlag 1991. S.32-33.
- ¹³ In: Gabriele Runge (Hrsg.): ebenda. S.32.
- ¹⁴ In: Gabriele Runge (Hrsg.): ebenda. S.32.
- ¹⁵ In: Gabriele Runge (Hrsg.): ebenda. S.32.
- ¹⁶ Dietmar Endstraßer: alte: *Junge Leser als Kritiker*. In: Gabriele Runge (Hrsg.): *Über Gudrun Pausewang*. Ravensberger Buchverlag 1991. S.108.
- ¹⁷ Gudrun Pausewang: *Friedfertigkeit. Kinder und Erwachsene müssen sich gemeinsam engagieren. Rede zur Verleihung des Gustav-Heinemann-Friedenspreises*. In: Gabriele Runge (Hrsg.): *Über Gudrun Pausewang*. Ravensburger Buchverlag 1991. S.30.
- ¹⁸ タイトルの直訳は『雲』だが、邦訳では『みえない雲』(小学館、高田ゆみこ訳)の名称が広まっ

ているので本論でも本作品に対してはこのタイトルを用いる。

¹⁹ Gudrun Pausewang: *Die letzten Kinder von Schewenborn*. Ravensburger Buchverlag 1997. S.13.

²⁰ Gudrun Pausewang: ebenda. S.18.

²¹ Gudrun Pausewang: ebenda 1997. S.13.

²² Uwe Jahnke: Gudrun Pausewang. *Leben und Werk*. Ravensberger Buchverlag 2010. S.101-102.

²³ オランダ語、デンマーク語、スペイン語、日本語、ギリシャ語、フランス語、英語、イタリア語、アラビア語、エスペラント語、中国語、ベルシャ語、韓国語に翻訳されている。日本語訳『最後の子どもたち』（小学館、高田ゆみこ訳）は1984年（昭和59年）に刊行された。Uwe Jahnke: *Gudrun Pausewang Leben und Werk*. Ravensburger Verlag. 2010., S.46.

²⁴ 映画は監督グレゴール・シュニツラー Gregor Schnitzler によるもの、コミックは西ドイツの漫画家アニケ・ハーゲ Anike Hage による。主人公の年齢や家族構成をはじめ、原作の内容とは違っている部分も少なくはないが、原発の危険性を訴える意図は小説、映画、コミックとも共通している。また、パウゼヴァング自身も映画化を喜んでおり、映画の出演者と一緒に撮った記念写真も公開されている。例：Uwe Jahnke: *Gudrun Pausewang. Leben und Werke*. Ravensburger Buchverlag 2010. S.55, S.56.

²⁵ Gudrun Pausewang: *Die letzten Kinder von Schewenborn*. Ravensburger Buchverlag 1997. S.27.

²⁶ Gudrun Pausewang: ebenda. S.27.

²⁷ Gudrun Pausewang: ebenda. S.28.

²⁸ Gudrun Pausewang: ebenda. S.34.

²⁹ Gudrun Pausewang: ebenda. S.34.

³⁰ Gudrun Pausewang: ebenda. S.34.

³¹ Gudrun Pausewang: ebenda. S.35.

³² Gudrun Pausewang: ebenda. S.41.

³³ Gudrun Pausewang: ebenda. S.59.

³⁴ Gudrun Pausewang: ebenda. S.59.

³⁵ Gudrun Pausewang: ebenda. S.75.

³⁶ Gudrun Pausewang: ebenda. S.80.

³⁷ Gudrun Pausewang: ebenda. S.93.

³⁸ Gudrun Pausewang: *Friedfertigkeit. Kinder und Erwachsene müssen sich gemeinsam engagieren. Rede zur Verleihung des Gustav-Heinemann-Friedenspreises*. In: Gabriele Runge (Hrsg.): *Über Gudrun Pausewang*. Ravensburger Buchverlag 1991. S.29.

³⁹ Gudrun Pausewang: ebenda. S.30.

⁴⁰ Gudrun Pausewang: ebenda. S.30-31.

⁴¹ Tilman Spreckelsen: *Das Angstmacher unserer Schulzeit*. In: Frankfurter Allgemeine 15.03.2011.